みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

小規模ミュージアムの資料管理：水俣病歴史考証館の事例から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平井, 京之介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009976

園田直子編『持続可能な博物館資料の保存を考える』
国立民族学博物館調査報告　155:89-99(2022)

小規模ミュージアムの資料管理
── 水俣病歴史考証館の事例から

平井　京之介
(国立民族学博物館)

1　はじめに
2　考証館の概要
3　展示内容
4　考証館の経済学
5　資料の保存環境
6　資料管理の事例
　6.1　生原稿の展示
　6.2　油絵の展示
　6.3　クラウドファンディング
7　おわりに

1　はじめに

多くの小規模ミュージアムでは，限られた運営資金を背景に，専門知識をもつ常勤スタッフがおらず，収蔵設備が整っていないなかで，いかにして貴重な資料を保存するかが大きな課題となっている[1)]。本稿の目的は，熊本県水俣市にある水俣病歴史考証館（以下，考証館）を事例として，小規模ミュージアムがどのような資料管理上の問題を抱えているか，そしてそれらの問題は彼らのミュージアム活動とどのような関係にあるかを考えてみることである。

考証館は，水俣病被害者の支援団体である水俣病センター相思社（以下，相思社）が運営する，水俣病を伝える資料館である。水俣病とは，簡単に言うと，1950年代から1960年代にかけて，水俣湾周辺の魚介類を多量に摂取することで生じた食中毒である。主に脳などの神経系が侵され，手足のしびれ，感覚障害，運動失調，視野狭窄などの症状がみられる。有機水銀を含むチッソ水俣工場の排水が原因だったが，1956年に発見されてから1968年まで，工場に責任があることを政府が認めなかったため，排水は止められずに被害が拡大した。現在までに行政によって「水俣病患者」と認定された者が約2,300人，その他にメチル水銀被害を受け，救済対象者として認められた者が約８万人いる。

2　考証館の概要

考証館について語るには，まず運営する相思社の起源についてふれなければならない。1960年代後半，水俣病の被害者が加害企業に補償と救済を求める運動，いわゆる水俣病

闘争が激しく繰り広げられた。その結果，1973年，第一次水俣病訴訟の原告は全面勝訴するが，補償金を得たからといって苦しみがなくなるわけではない。そこで1974年，運動に献身的にかかわっていた支援者たちの提案で，勝訴後に被害者の健康と生活を保障していく公共的な施設として相思社が設立された。相思社の具体的な活動計画のなかには，水俣病や水俣病運動にかかわる記録を収集し保存する資料室をつくるという案も含まれていた。

設立後しばらくは，「水俣病患者」としての認定を求める運動，いわゆる未認定患者運動と，水俣病被害者が生産した低農薬甘夏の販売を主な活動としていた。しかし1988年，使われなくなったキノコ栽培工場を改装して考証館を設立する。さらに1989年には，活動の中心を「水俣病に関する資料を収集・保存・展示し，水俣病事件の経験を正しく伝えていく」ことに定めた。この年を境に，チッソと行政の責任を追及し被害者への補償と救済を求める公害闘争から，考証館を中心に「水俣病を伝える活動」へと運動を転換したのである[2)]。

2021年３月現在，相思社には常勤職員が６名，パートが２名いるが，専門知識をもつ学芸員はいない。日ごとに職員が交替で考証館を担当し，受付と展示解説をおこなっている。開館時間は月曜日から金曜日の９時から17時と，日曜日の10時から16時で，入館料は大人550円，団体440円である。新型コロナウイルス感染拡大以前で，入館者は年間2,000人程度であった。熊本県の最南端にある水俣市の，市街地から離れた交通の不便な場所にある考証館に，いわゆる観光客はほとんど来ない。来館者の多くは他府県から水俣病学習のためにわざわざ水俣に来て，考証館を訪れる。長いあいだ地域社会で水俣病問題が忌避されてきたこともあり，学校団体を除き，関係者以外で来館する地元住民はあまりいない。

3　展示内容

考証館の展示は解説パネルや歴史的文書，写真が中心である。神経系の病い，被害者運動，差別などが主なテーマになっていることから，モノ資料が少ないのはしかたのないことと思われる。展示室入り口付近に展示されている多くの漁具がおそらくもっとも目立つ実物資料だろう。初期の被害者の多くが漁民だったことから，被害を受ける以前の自然と一体化した彼らの暮らしがここで表現されている。他に貴重な実物資料としては，1957年頃，水俣病の原因究明の実験で飼われていたネコの小屋がある。畑で農具入れとして使われていたところを相思社の職員が譲り受けてきたという。また，チッソの排水口付近でヘドロ浚渫前に職員が採取したという高濃度の水銀ヘドロも他所ではみられないものだろう。水俣病闘争のシンボルだった怨旗は，相思社設立に携わった「水俣病を告発する会」がかつて使用していたものだ。水俣病被害者の実態を赤裸々に描き，

支援運動のバイブルといわれた『苦海浄土』の生原稿は，著者の石牟礼道子が寄贈したものである。

これらの実物資料は相思社に寄託されているとみることができる。展示のために相思社が購入した資料はひとつもない。資料はすべて，1980年代以降，水俣病被害者ないしその家族から譲り受けたものである。法的権利が処理されたことはなく，あいまいなままで寄贈ないし寄託されてきた。今となっては，元の所有者がなくなっていたり，高齢で記憶が不明瞭だったり，当時の相思社職員が退職していたりで，寄贈したのか寄託したのか，互いにわからなくなっていることも少なくない。それでも相思社と元の所有者ないしその遺族との信頼関係のもとで展示は維持されている。仮に元の所有者や遺族から返還の要求があれば，多少の話し合いがもたれることはあっても，相思社は応じることになるだろう。

写真についても同じで，展示されている写真は，相思社に関わりのあった写真家が，相思社に関わりのあった被害者や支援者を撮影したものである。写真家も写っている人も，相思社の活動や考証館の趣旨に賛同して，信頼関係のもとで展示を承認していると考えられる。写っている被害者の遺族から非公開の要望が出されたことが過去に何度かあったが，その際は，遺族との信頼関係を大切にして，あるいは被害者の心情を優先して，公開中止という対応を相思社はとってきた。

4　考証館の経済学

最近少し変化がみられるものの，長いあいだ相思社では考証館をもつことの価値が十分に認められてこなかった。それは彼らが目先の利益にとらわれていたからである。考証館を開館するには人件費がかかる。とりわけ休日は事務所が休業するため，当番を決めて誰かが考証館のために出勤しなければならない。しかしそれに見合う入館料収入は得られない。直接的な収支だけをみると，一見採算がとれないようにみえる。しかしこれはまったくの誤解だろう。

第一に，考証館にそれほどの経費はかかっていないはずだ。館内は来館者の滞在中だけ点灯している。小展示室を除き，2019年までは冷暖房設備もなかった。考証館当番は常駐するわけではなく，来館者が来たときだけ対応し，それ以外は別棟にある事務室で他の業務に当たっている。時間単位でみれば人件費もあまりかかっていないはずだ。職員の認識とは異なり，単体でみても考証館にそれほど赤字は出ていないだろう。

より重要なことは，考証館が相思社の活動全体の中核になっていることである。考証館では，職員が無償で来館者に展示ガイドをおこなっている。建前では団体だけのサービスなのだが，忙しくない限り，個人でも依頼があれば断らない。20分から30分程度，来館者の関心に合わせ，水俣病発生の原因，被害が拡大した理由，被害者への補償制度，

現在まで続く差別や偏見，「もやい直し」と呼ばれる水俣市の取り組みなどについて，自らの経験や意見を織り交ぜながら熱っぽく職員が語る。そして水俣で起きたことについてどう感じるか，そこから何を考えるかを来館者に問いかける。来館者が質問し，職員が答え，両者のあいだで意見交換になる。展示ガイドは考証館の一番の魅力であり，これを目当てに訪れる者も少なくない[3)]。

展示ガイドは収入にはならないが，一方で相思社の大きな収入源である「水俣まち案内」の起点という重要な役割を果たしている。水俣まち案内とは，相思社職員がガイドとなって水俣市内を案内する有償のサービスである。案内先は主に水俣市内の水俣病と関連する場所だが，石けん作りやゴミ分別などの体験学習を含めることもできる。中学・高校の修学旅行や大学・一般団体の研修旅行のコーディネートもしており，これらも相思社の大きな収入源となっている。そして水俣まち案内や研修旅行にはほぼ例外なく考証館見学が含まれる。考証館で水俣病の概説を聞いてから市内へ見学に行くことで，見学先に興味が湧き理解が深まるのである。

また，考証館の展示ガイドは相思社維持会員の獲得にも寄与している。寄附金は相思社の収入全体の３分の１に達する財政の柱だが，その大部分を相思社維持会員からの会費が占めている。維持会員とは，相思社の活動に賛同する人に年会費を払って会員になってもらう制度である。新規会員のほとんどは，考証館を見学に訪れ，職員の話を聞き，相思社の活動の趣旨に賛同して会員になっている。すなわち考証館の展示ガイドは維持会員を勧誘する重要な機会なのである。

さらに維持会員の獲得は，相思社のその他収益事業の拡大にも貢献している。相思社では，水俣病を伝える活動を財政面で支えるために，低農薬ミカンや低農薬茶，水俣病関連書籍の販売を事業としておこっている。これは収益だけが目的ではなく，生産者である水俣病被害者や地域住民の経済的支援，環境に配慮した安全安心な商品の販売，水俣病の歴史と現在を伝える活動，相思社を支援するネットワークの維持といった役割を併せもつものである。これら商品の購入者は主として維持会員である。定期的に送られてくる機関誌やＥメールを読み，低農薬ミカンや低農薬茶を彼らが購入する。つまり相思社の収益事業は，考証館の展示ガイドを通じて集められた維持会員を顧客として成立しているのだ。このように，相思社の水俣病を伝える活動全体が考証館を中心に展開しているといってよいのだが，このことは職員たちに十分認識されてこなかった[4)]。

考証館の過小評価は，維持管理費を出し惜しみするという相思社の姿勢につながってきた。職員には資料管理に関する専門知識が乏しい。また資料管理に費用をかけてもすぐに来館者増にはつながらない。それゆえ見た目に大きな問題がなく，来館者から苦情も出ず，とりあえずは展示ガイドに支障がなければ，考証館に費用をかける必要はないと考えられてきた。そして結果的に，許容可能な資料のダメージは相当に高いレベルに設定されてきた。

5 資料の保存環境

小規模ミュージアムは，既存の施設を展示場に転用している場合が少なくない。当然，他の用途で建てられたものは，資料の保存に適した環境が整っているとは限らない。

すでに述べたとおり，考証館の建物は，1974年に建設されたキノコ栽培工場を転用したものである。壁はブロック，屋根はスレートで天井がない。もともと居住性は考慮されていなかった。1988年に考証館に改装した際，屋根を二重にして，煙突のような空気孔を３つ付けた。それでも真夏は暑すぎ真冬は寒すぎて，展示をゆっくり眺めることは難しい。10分以上展示室内にいるのは苦痛である。屋根の下に隙間があるにもかかわらず，入り口扉を全開にしない限り，空気はほぼ滞留している[5)]。

展示室の奥に隣接して小展示室がある。この建物は改装前に事務室だったこともあり，もともと居住性を考えてつくられている。現在はミュージアムショップになっており，エアコンと除湿機が設置されている。ただし台風のときには雨樋に枯葉が詰まり，雨漏りすることがあった。

展示室は，ほぼ毎日，当番一人が20分程度清掃している。外周に積もった枯葉をホウキで掃き，館内で掃除機をかけ，時折，展示物をハタキで叩く。年に１，２回，目視による資料点検をおこなっている。あとは気づいたときに資料の目立った汚れを取り除いたり，破損したところを修理したりするくらいである。温湿度管理もモニタリングもしていない。小展示室の奥にバックヤードがあるが，ここには資料を保管していない。主な資料はほとんど展示しており，一部の写真や資料を別棟の倉庫に保管している[6)]。

6 資料管理の事例

相思社は，資料の保存管理のための方針や計画を特に定めていない。問題が生じたとき，あるいは来館者からの指摘を受けて，職員が場当たり的に対処している。ここではそうした対処の事例を３つ紹介する。

6.1 生原稿の展示

考証館の目玉といえる展示のひとつに『苦海浄土』の生原稿がある。相思社設立に深く関わった著者の石牟礼道子がかつて寄贈したものだ。2004年にわたしがはじめて考証館を見学したとき，この生原稿は，「水俣病事件をめぐる表現活動」というキャプションがついた大型展示ケースの中で，多くの出版物とともに展示されていた。展示室出口付近にあったこともあり，来館者のほとんどは原稿には気づかずに通り過ぎていたに違いない。長いあいだ動かされていなかったことが，一枚目の原稿用紙の黄ばみ具合から推察された。

2005年，わたしは相思社で半年ほどフィールドワークを実施した。このとき，『苦海浄土』はまだ同じ状態で展示されていた。『苦海浄土』といえば水俣病の存在を全国に知らしめた歴史的な作品であり，水俣病運動のバイブルといってよい。それをなぜこんなにぞんざいに扱うのかとたずねると，ある職員は２つの理由を挙げた。ひとつは，水俣では水俣病は地元の恥とされており，それを世に知らしめた石牟礼道子の評判がけっして高くないこと，もうひとつは，1990年代に水俣病運動の方針をめぐって石牟礼道子と意見が分かれ，以来，相思社とは関係が疎遠になっていることである。この生原稿は考証館の宝のひとつであり，来館者には関心が高いはずだから，劣化を防ぐ措置をしたうえでもっと目立つように展示すべきだとわたしは主張した。そのせいだろうか，2006年にわたしが訪れたとき，生原稿は引っ込められ，代わりにふつうのコピー用紙に複写したものが展示されていた。

2011年に相思社を再訪すると，職員がわたしを考証館に連れて行き，調湿機の付いた密閉型の単体式展示ケースを自慢げにみせた。財団から文化財保護の助成金を受けて，知り合いの大工に作らせたものだという。中には水俣病被害者の手を写した一枚の写真が入っていた。相思社とかかわりがあった米国の写真家，ユージン・スミスの作で，オリジナルプリントだという。「『苦海浄土』の生原稿の方が貴重のように思えるけど」とわたしは感想を述べた。

2012年に行くと，今度はその展示ケースの中身が『苦海浄土』の生原稿に替わっていた。わたしにいわれたことだけがその理由ではなかったと思う。当時，全国レベルで石牟礼道子の作家としての評価が高まっていた。2004年に始まった『石牟礼道子全集　不知火』全18巻の刊行が進んでいた。また2011年には，池澤夏樹個人編集による『世界文学全集』全30巻のひとつに，戦後日本を代表する文学として『苦海浄土』が選ばれた。こうした石牟礼作品の再評価は，ルポルタージュとしてではなく文学作品としてのものであり，地元でも石牟礼の評価を大きく変え始めていた。

2014年，水俣湾の埋立地にある水俣市立水俣病資料館（以下，市立資料館）で，1993年設立以来はじめての大幅展示リニューアルが計画された。計画のなかに『苦海浄土』の生原稿のレプリカを展示するという案があった。市立資料館は当初，レプリカ製作のために相思社から原稿を借りようとしたが，拒否された。ライバルである市立資料館の展示が魅力的なものになるのをおそれたのかもしれない。市立資料館はしかたなく関西の博物館に協力を要請し，結果的にその博物館が所有する生原稿を購入することになった。しばらくして，NHKがある番組のために，市立資料館の購入した生原稿と相思社所蔵の生原稿とを並べて写真に撮った。すると両者の保存状態の違いが一目瞭然となった。関西の博物館から来た原稿が真っ白でピンと伸びていたのに対し，相思社の原稿は黄ばんで端がよれていたのである。わたしは相思社の職員に向かい，NHKの写真は相思社が人類の共有財産である貴重な資料をどのように扱ってきたかを示すものであり，いわば

相思社の「犯罪の証拠」であると非難した。

6.2 油絵の展示

2015年秋，わたしは相思社の職員から一通のメールをもらった。水俣病被害者の遺族から油絵を4枚譲り受けたのだが，表面に割れ目があり，それが広がっているようにもみえる。どうしたらよいか，という相談だった。添付された写真をみると，確かに深割れしているようにみえる。しかしそれよりわたしが気になったのは，絵が展示されていた位置である。台風が来ると雨風が吹き込みかねない。くわえて4枚のうちの2枚は磨りガラスを通して日光が当たる位置に掛けられている。わたしは保存科学が専門の同僚に相談し，まずは温湿度を計測してみることにした。2015年10月6日から，現在の絵の位置，移動先の候補となる小展示室，そして外気にデータロガーを設置した。1週間データをとってみると，絵の展示場所が温湿度ともにほぼ外気の変化と同じだったのに対し，小展示室の方はかなり安定していた。小展示室には天井があり外気が直接入らないようになっていること，展示室の壁がブロックなのに対し小展示室の壁は木造であることがその主な理由のようだった。また，小展示室にはエアコンがあり，少なくとも来館者がいるあいだはそれが稼働する。小さいが除湿機も設置してある。そこで職員と相談し，小展示室にあった小さい窓を板で塞ぎ，照明の数を減らしたうえで，4枚の油絵をすべて小展示室に移すことにした。

考証館で絵画が展示されたことはこれまでに一度もない。今回は寄贈者が展示を強く希望したので，保存環境のことはあまり考えずに展示室の空いている場所にとりあえず掛けたというのだった。遺族はもともと絵を市立資料館に寄贈していたが，まるで展示してくれる様子がないので，怒って取り返してきたのだという。作者は石本寅重という地元の画家である。すでに亡くなっているが，水俣病の被害者だった。1954年，水俣の漁村でネコがいなくなりネズミが増えて困ると役所に訴えたことで知られる人物でもある。この訴えが水俣病の徴候を伝える最初の新聞報道につながったとされている。4点の絵のうち3点は地元の漁港の様子を描いたものであり，水俣病発生当時の風俗をうかがい知ることができる貴重な歴史的資料にもなっている。

絵の展示場所を移して以降，約1年間，データロガーを設置して小展示室の温湿度を職員に計測してもらった。真夏の温度が25度を少し超えるのは気になるが，相対湿度は50％から70％のあいだでかろうじて落ち着いている。これまでのところ，油絵の表面の亀裂が明らかに拡大したという報告は受けていない。

6.3 クラウドファンディング

2018年6月，相思社は考証館の改修を目的としてクラウドファンディングを募った。「開館30周年記念改修プロジェクト」と銘打ち，目標を245万円に設定した。資金の使途

としては，第一に，考証館周辺の環境整備を挙げた。トイレの天井修理，考証館の壁の塗装，小展示室天井裏の獣害対策，外周にあるクスノキの伐採などである。その他に，酸性紙資料の脱酸性化処理，密閉型ショーケースの製作，展示パネルの再プリントも資金の使途に挙げた。早めに目標を達成したため，途中で設定金額を上げ，結果的に44日間で247人から400万円を集めることに成功した。そこで，当初の予定にはなかったが，大型の業務用エアコンを２台展示室に購入した。

相思社の職員会議でクラウドファンディングを募ることが正式に提案されたのは，2015年にわたしが相思社に滞在していたときだった。数年前から日本にもクラウドファンディングのさまざまなサービスが誕生し，マスコミで紹介される成功事例が相思社でも話題になっていた。職員会議では，考証館の改修や資料室の建て替えのように，目的が明確なプロジェクトの方が成功の可能性が高いだろうという意見が出た。このときはクラウドファンディングに挑戦するという話がまず先にあった。

いろんな選択肢を考えるなかで考証館を改修することに決めたのだが，それには２つの背景があったと考えられる。ひとつは，ちょうどこのとき，相思社に油絵が寄託され，考証館で温湿度を測定していたことである。当時，わたしは折にふれて相思社の会議で資料管理の重要性を訴えていた。もうひとつは，市立資料館が2016年のリニューアル開館に向けて準備の最終段階にあったことである。リニューアルの専門家会議には相思社職員のひとりもメンバーになっており，月１回のペースで会議に参加していた。市立資料館の新しい展示には被害者の意見がこれまで以上に取り入れられ，考証館の展示に似てくることが予想されていた。しかもそれは，最新の展示設備や精巧なレプリカを導入して制作されることになっており，市立資料館に来館者を奪われるのではないかと相思社では心配しているようだった。

相思社のクラウドファンディングは，こうした市立資料館の動きに対抗しようとするものだったとみることができる。設立当時は対立していた被害者から協力を得られなかったこともあり，市立資料館にほとんど実物資料はないが，大手ディスプレイデザイン会社が多大な費用をかけて魅力的な展示をつくろうとしている。一方，考証館の展示は職員の手作りで，技術的には市立資料館と比べるべくもないが，魅力的な実物資料が少なからずある。ほとんどが文書の類いだが，展示していない実物資料がまだ倉庫に眠っている。酸性紙を脱酸性化処理したうえで，密閉型ショーケースに入れて展示したい。こうした思いが開館30周年記念改修プロジェクトというクラウドファンディングにつながった。市立資料館のリニューアルをきっかけとして，貴重な実物資料こそが考証館の強みであり，これらを大切に保存しつつ公開したいという意識が，職員のあいだに芽生えたのである。

これには後日談がある。2020年，わたしは相思社職員から資料にカビが出たという知らせを受けた。とりあえずカビを拭き取りショーケースに調湿剤を入れたが，原因がわ

からないため，またいつ出るか心配である，という話だった。わたしが行ってみると，カビが多く出ていたのはクラウドファンディングで導入した密閉型ショーケースに入れた紙資料だった。この年，水俣では梅雨がいつもより長かった。そのうえ新型コロナウイルス感染拡大の影響で年間を通じて来館者が少なく，考証館はほぼ閉じた状態で，換気が十分にされていなかった。大型業務用エアコンの設置がカビの発生に影響したとも考えられるが，この年はほとんどエアコンを作動させなかったというから，その可能性は低いだろう。以前からある密閉型ショーケースの中の紙資料には発生していなかったことから，新しい木製のショーケースがカビ発生の原因になったと考えられる。じっさい，確認のため職員に聞いてみると，カビが一番ひどかったのは新しい木製ショーケースの側面の板だったという。2019年の梅雨にはカビが発生しなかったらしいが，おそらく梅雨が短かったことと，来館者があって結果的に換気がおこなわれていたことで，この年には発生しなかったのではないかと推測される。

7 おわりに

小規模ミュージアムのなかには，企業や商業施設，文化施設，娯楽施設などの付属施設として運営されているところが少なくない。そうしたところでは，展示や保存，教育，レクリエーションなどの活動は，その本体組織の歴史や文化に根づいたものになっている（Clavir 2002: xix）。

考証館は相思社の活動と一体となって運営されている。それどころか，考証館は相思社の水俣病を伝える活動の中心になっている。しかし直接的な収入が多くないゆえに，考証館は職員に経済的負担としてみられてきた。そして建物の維持や資料管理にほとんど費用がかけられてこなかった。大きな問題が生じたときにだけ個別の策を追加するといった場当たり的な対応がとられてきた。

ところが，市立資料館の展示リニューアルをきっかけとして，考証館における資料管理は転換期を迎えた。2014年，市立資料館が大規模な展示リニューアルの準備を始めると，相思社ではこれに対抗して，それまで倉庫に眠っていた資料を引っ張り出し，保存管理も意識しつつ公開するようになった。彼らのあいだで，市立資料館にはない実物資料の真正性やオリジナリティこそが，考証館の強みであることが認識されるようになったためである。専門知識に乏しく，まだ手探り状態ではあるものの，「問題が起きてから対処するという後手ではなく，資料をよい状態に保つために，日常的に何をしたらいいのかという点に意識を向」（園田 2011: 195）ける，いわゆる予防保存，あるいは「保存環境作り」（三浦 2004: iii）が始まったのである。2020年以降，新型コロナウイルス感染拡大の状況のなかで仕事が減り，職員に時間的余裕が生まれると，相思社ではこれまで以上に考証館の資料管理について真剣に考えるようになっている。

小規模ミュージアムといえども，考証館は社会に提供できる多くの貴重な資料を所蔵している。それらは加害企業や行政，日本社会による過去の過ちの証拠といってもよい(cf. Eastop 2006: 518)。過ちを忘れる，あるいは忘れさせようとする人びとが多くいるなかで，それらを適切に保存し次世代に遺していくことは，二度と同じ過ちを繰り返さないような社会を実現するために必要なことだろう。資料を収集し，保存し，展示すること自体が社会運動になっている。これは被害者や相思社にとってばかりでなく，社会にとっても意義のあることに違いない。小規模ミュージアムのもつ貴重な資料をどう保存していくかは，社会全体で考えていくべき課題ではないだろうか。

謝辞

本稿の基礎となった現地調査においては，水俣病センター相思社の皆さんにたいへんお世話になった。とりわけ遠藤邦夫さんと小泉初恵さんには草稿にも目を通していただき，貴重なコメントをいただいた。ここに記して謝意を表す。また，調査の実施，分析にあたり，国立民族学博物館の園田直子さん，日髙真吾さん，和髙智美さん，河村友佳子さん，橋本沙知さんから多くの助言をいただいた。ここに改めて謝意を表する。

注

1）文化庁の統計によれば，2018年10月時点で，日本には5,738館のミュージアム（博物館）がある。その約３分の２は市町村レベルの小規模なミュージアムであるといわれている。しかし本稿で論じる水俣病歴史考証館のように，これに含まれない小規模な展示施設が全国には数多くあると思われる。

2）水俣病を伝える活動とは，広く社会一般に向けて水俣病の歴史を伝え，その今日的意味を考えさせようとする活動である。具体的には，考証館の運営，職員が水俣市内を案内する「水俣まち案内」，被害者に経験を語ってもらう「語り部」講話，学校や公民館での出張講演などがある。運動を転換した経緯については，平井（2021）を参照。

3）詳しくは，平井（2012）を参照。

4）くわえて，財政面以外での考証館の重要性，すなわち考証館を舞台とする交流が，来館者にとってばかりでなく相思社にとっても，かけがえのない価値をもつものである点を指摘することができる。平井（2012）を参照。

5）後で述べるように，2019年，展示室に業務用のエアコンを２台設置した。ところが，どちらも吹き出し口を高い位置につけたため，暖房時は暖かい空気が上方に溜まり，運転効率が悪い。

6）相思社は考証館とは別に資料室をもっている。10万点以上の水俣病関連の図書・記録資料，約10万点の水俣病関連新聞記事，約７万点の写真資料，約1,000点の映像資料，約1,700点の音声資料を収蔵する，水俣病関連の世界一のアーカイブである。

参照文献

〈日本語〉

園田直子

2011 「紙資料保存のための環境整備」園田直子編『紙と本の保存科学』pp. 187–198, 東京：岩田書院。

平井京之介

2012 「運動する博物館 ── 水俣病歴史考証館の対抗的実践」『国立民族学博物館研究報告』36(4): 531–559。

2021 「考証館運動の生成 ── 水俣病運動界の変容と相思社」『国立民族学博物館研究報告』45(4): 575–654。

三浦定俊

2004 「序」三浦定俊・佐野千絵・木川りか編『文化財保存環境学』pp. i–iii, 東京：朝倉書店。

〈外国語〉

Clavir, M.

2002 *Preserving What Is Valued: Museums, Conservation, and First Nations*. Vancouver: UBC Press.

Eastop, D.

2006 Conservation as Material Culture. In C. Tilley et al. (eds.) *Handbook of Material Culture*, pp. 516–533. London: Sage Publications.